訳者後記

『アメリカ精神医学雑誌 *American Journal of Psychiatry*』という一流医学誌の二〇〇五年四月号（第一六二巻四号）に、著名な精神科医による、本書（二〇〇三年）の原著の書評が掲載されています。イアン・スティーヴンソン（以下、著者）の著書では、この種のことはさほど珍しくありません。また、著者の生まれ変わりに関する研究論文自体も、いくつかの一流医学雑誌に掲載されています。中でも、由緒ある『神経精神病学雑誌 *Journal of Nervous and Mental Disease*』は、超常現象の研究にかなり好意的で、一九七七年には、ほとんどのページを著者の生まれ変わり研究にあてた特集号（一六五巻三号）を発行しています。その雑誌の編集長は、その号の巻頭言で次のように述べています。これまでにも引用したことのある文章ですが、重要なのでもう一度引用します。

> 一流雑誌の多くは、ＥＳＰをはじめとする超常現象の研究を、現代の科学観に合わないという理由で自動的に退けてきた。〔中略〕このような特集を組んだ理由は、執筆者が、科学的にも個人的にも信頼に足る人物であること、正当な研究法をとっていること、合理的な思考をしていること、といった点にある。以上の条件が満たされるなら、人間の行動に関する知識の増進をめざす雑誌が、このようなテーマの論文を自動的に不採用にすべきではないし、そうしてはならない義務があると思う（Brody, 1977, p. 151）。

わが国では、超常現象の研究論文や研究書の書評が主流の医学雑誌に掲載されるようなことは、残念ながらありえないでしょう。個人的には関心を持つ専門家もいるのに、公的なレベルでは〝うさんくさい〟として却

下されてしまうのです。こうした両国の差は、簡単に埋まるものではありません。西洋で発達した科学という人間の営み（自分を喜ばせるための個人的創造活動）が、昔から技術（多くの場合、他人を喜ばせるための集団的な仕事）で身を立ててきた、西洋とは根本的に体質が違う日本という国に受け入れられるのは、至難の業なのかもしれません。もちろん、欧米でも、超常現象研究に対する風あたりは、日本ほどではないにせよ、かなり強くあります。その中で、この巻頭言は、科学雑誌はかくあるべし、という見本のような姿勢を打ち出しています。

超常現象の研究法には、一九世紀末から続けられてきた偶発例の調査研究法と、超心理学の〝創始者〟J・B・ラインが一九三〇年代に始めた、統計を使った実験室的な研究法とがあります。それまでにも実験的な研究はありましたが、ラインの方法は、当時の実験心理学の方法を模し、主として科学者の説得を目指したものでした。ところが、その歴史は既に七〇年以上になるにもかかわらず、今なお、その目的が達成されたとはとうてい言えない状況にあります。それに対して、当初からライン流の研究法に批判的だった著者は、伝統的な方法を使った研究に専念してきました。この方面の四五年に及ぶ著者の研究は、超常現象（要するに、心の持つ力が起こす現象）全般に及んでいます（一例をあげれば、一九八一年には清田益章の金属変形と念写の実験をしています）が、その中で最も力を入れたのが、前世を記憶しているように見える子どもたちの調査研究でした。

本稿では、著者の講演（Stevenson, 1989）やインタビュー記事（Wallis, 1999）、著者の現地（レバノンとインド）調査に同行取材した『ワシントン・ポスト』紙の編集者の著書（シュローダー、二〇〇二年）[註1]などをもとに、この方面の研究に着手するまでの著者の足跡をたどり、この研究の意味を考えてみることにしましょう。

スティーヴンソンと生まれ変わり研究

一九一八年にカナダに生まれた著者は、今年で八七歳になるわけですが、二〇〇二年にヴァージニア大学精神科人格研究室の責任者を退いた後も、今なお同研究室の研究教授を務め、精力的に研究を続けています。

少年時代から歴史に深い関心を寄せていた著者は、まず、スコットランドの大学で歴史学を学びました。しかし、歴史学では「仕事とするにはちょっともの足りない感じ」がしたため、その後、より人のためになる医学の道を志しました。とはいえ、歴史に対する関心は、現在に至るまで、衰えることなく続いています。著者の歴史に関する深い造詣が、本書の随所ににじみ出ていることは、一読しておわかりいただけるでしょう。また、著者には読書癖と言うべきものもあり、文学や人文科学全般を今でも読み続けているそうです。

カナダの医科大学を卒業後、二年間のインターンの途中で、健康上の理由からアメリカ南部に移住した著者は、二八歳の時、ルイジアナ州の大学で生化学の研究を始めました。その中で、ノーベル賞を受賞したドイツの生化学者の学説を覆すデータが動物実験で得られます。ところが、そのデータを聞き知ったドイツの別の生化学者に、その研究をドイツで発表することはできないだろうと言われたのです。これは、科学の建前を無視して、権威が事実を拒絶することを示す好例です。この時、著者の心に、「独創的な研究をし、その結果を人に伝える際に直面するあらゆる障害」に対して、強い関心が生まれたのでした。単に反発するかあきらめる平凡な研究者とは違って、より根源的な問題に立ち向かおうとする著者の姿勢は、やはり非凡なものと言えるでしょう。

心が体に及ぼす影響に強い関心を寄せていた著者は、もっと人間全体に迫れる研究をしたいと考えていました。

註1　この著書は、著者の調査研究がどのような背景や状況で行なわれているのかを知るためには絶好の資料ですので、関心のある方ばかりでなく、著者の研究に批判的な方も、この本をぜひお読みください。著者の研究に対して、安易な批判ができにくくなると思います。私事になりますが、訳者は、スティーヴンソンに紹介された著者のシュローダーから依頼されたため、この原著の邦訳出版社を探していたのですが、残念ながら別の出版社が翻訳権を獲得してしまい、別の訳者の手で出版されることになってしまいました。この邦訳書は、たとえば、「アメリカ心霊研究協会」と訳すべきところ、「アメリカンソサエティー精神研究所」などという、事情を知っている者からすると意味不明な訳語が少なくありません。訳がこなれているだけに非常に残念です。

そのため、翌一九四七年に心臓病の心身医学的研究を始めます。心身医学のまさに黎明期です。しかもそこは、ハロルド・G・ウォルフという、後に世界にその名を馳せることになる、心身医学の中心的指導者の研究室でした。初期の心身医学研究の文献を見ると、著者の論文が、一部はウォルフと共著で、たくさん掲載されているのがわかります。著者は、新進気鋭の心身医学研究者として、高く評価されるようになったのです。

研究を続けるうち著者は、怒りや恐怖を抱いた時と同じく、格別の喜びがあった時にも、同様の心身症が起こることに気づくようになりました。一般の心身医学研究者は、そのようなことに気づいても、「うれしいこともストレスになる」として片づけてしまい、その種の現象自体に着目することがないのですが、著者は違っていました。ここでも著者の読書癖が功を奏します。古今の資料から、そうした実例をたくさん探し出したのです。それによると、たとえば本書にも登場する病床のゴヤは、フランスに亡命していた息子からすぐに見舞いに行くという手紙を受け取った直後に死亡しているそうですし、やはり病床にあったベートーヴェンも、財政難を解消してくれるはずの一〇〇ポンドが、ロンドンから舞い込んだ直後に死亡しているそうです。

そうした観察事実をまとめた論文を発表しようとした著者は、生化学研究の時と同種の抵抗に再び直面します。著者の指導者のウォルフは、厳密な研究法をとる一方で、心身症状の目的論的解釈（症状には何らかの目的があるという考えかた）に固執していました。おそらくそのためもあってウォルフは、著者の論文をかなり冷ややかな目で迎えたのでした。著者がその論文を発表することができたのは、ウォルフのもとを離れた後でした。

アメリカでは一九五〇年代に、心身医学が独立した分野になるという期待が裏切られたため、心身医学の研究者たちは、内科と精神科という既存の分野に散らばって行きました。著者は、「心理状態が体の状態に及ぼす影響の研究を深めるうえで、精神医学のほうが内科よりも機会に恵まれているように思われた」ことから、精神科を選びました。そして、その勉強のため、精神分析の研究所に入り、ふたつの研究所に合わせて七年ほど在籍したのです。〝折衷的〟な姿勢をとる著者は、そこでもかなりの違和感を抱きます。この分野では、フロイトと一

部の弟子がまさに神格化されていて、他の研究者の著作を読む者はなく、それが議論の対象になることもなかったからです。精神分析の考えでは、芸術であれ宗教であれ、すべては幼少期の願望や葛藤の現われにすぎません。しかし、その科学的根拠はなさそうでした。科学であれば、患者の発言が個々に確認できなければなりませんが、精神分析はそうではありません。著者の目から見ると、「フロイトの最大の誤りは、幼少期に受けたという性的誘惑についての患者の主張が事実かどうかを、確かめようとしなかったこと」にありました。

そしてまとめた論文は、人間の人格は幼少期や小児期のほうが、後年より影響を受けやすいか、という疑問に関するものでした。これによって著者は、幼時の体験がその後を左右するという精神分析の屋台骨に疑義を唱えたのでした。それと同時に、この方向が、後の生まれ変わり研究のためのひとつの礎石になったのです。この論文が出た時、ロンドンの精神医学研究所の教授から、「丸腰で街を歩き回ってもだいじょうぶか」と聞かれたそうです。それほど当時のアメリカの精神科は、幼時の体験を絶対視する精神分析に染まりきっていたのです。

著者は、一九五七年にヴァージニア大学精神科の主任教授に就任します。三九歳のことでした。まもなく、例によって読書癖を活用し、それまで関心のあった生まれ変わりの実例を、世界中のさまざまな資料から四四例も探し出し、そのうちの七例を要約して紹介しました。その第一例が、平田篤胤（あつたね）が採取し、小泉八雲が英語で紹介した「勝五郎」の事例でした。その論文を見た人から、資金の援助を受け、一九六一年にインドへの調査旅行に出かけたのが、生まれ変わり研究の出発点になりました。その後は、いくつかの障害にぶつかり、各方面から強い批判にさらされ続けたものの、研究が順調に進展して現在に至ったわけです。このように振り返ってみると、反骨精神のきわめて旺盛な著者の生涯には、むだというものがほとんどないことがわかります。

生まれ変わりという考えかたが持つ意味

言うまでもありませんが、人間の本質についての考えかたは、時代とともに変遷します。一六世紀にわが国に

渡来したキリシタン（カトリック）たちは、現在とは逆に、魂の存在を否定する〝合理主義者〟の織田信長に向かって、真剣に魂の存在を説いていたのです。しかし、「もし現在でもなお、異端者が火あぶりの刑に処せられるとすれば、一六世紀に魂の存在を肯定した者を火あぶりにしたキリスト教神学者の、科学における後継者たちは、魂の存在を肯定する者を火あぶりにする」（Stevenson, 1989）ことでしょう。[註2]

多くの科学者は、科学の建前とは裏腹に、現行の科学知識を永遠に変わらない絶対的なものと考えているようです。このように「方法と結果を混同している」科学者たちの態度を見聞きするにつけ、著者はいつも愕然とするそうです。科学とは方法のことであって、その結果として生み出される科学知識とは区別しなければなりません。科学という方法は、将来的にも同じように利用されるでしょうが、科学知識は、絶えず塗り替えられる宿命にあるのです。現行の科学知識を絶対視する人たちは、真の科学者とは似て非なるものなのです。

生まれ変わりを思わせる事例の研究は、超常現象の研究者の間でも最も抵抗が強いものです。それは、この方面の研究が、他の超常現象の研究よりもインパクトが強いことの現われでもあります。本書には、現在の医学や心理学の知識では説明できないさまざまな現象が、具体的な証言として描き出されています。それには、前世の人格の体にあった傷と対応する母斑や先天性欠損を別にしても、たとえば次のような現象があります。

- 喃語（なんご）や幼児語の段階を経ずに、いきなりおとな的な話しかたをする（マルヤ＝リイサ・カアルティネン〔二八八―二九八ページ〕などの事例）
- 今まで使ったことのない言葉や単語を使う（グレアム・ルグロ〔一八一―一八八ページ〕やナデージュ・ジュグー〔一九五―二一〇ページ〕の事例）
- 教えられずに文字が読める（ディッタ・ラウルスドッティル〔二七七―二八八ページ〕の事例）
- 生後に身につけたはずのない技術を発揮する（ゲデオン・ハイハー〔二四二―二六四ページ〕などの事例）

これらは、生まれ変わりという考えかたを裏づける有力な証拠になるわけですが、それを別にしても、これらの観察や主張が正しければ、言語や技能の習得に関するこれまでの考えかたを修正する必要が出てきます。[註3] だからこそ、このような観察や主張に直面した時、科学者は、ひたすらそれを無視したり、超常現象の研究に無知のまま、現行の科学知識を持ち出してそれを否定するのではなく、それを自分の手で確認しようと努める必要があるのです。そこにこそ、科学の存在理由があります。ところが、私の知る限り、超常現象の研究に対する批判者たちは、ごく稀な例外を除いて、真の意味での科学者としての対応を避け続けてきました（笠原、一九八七年）。このようなふしぎな現象が見られることも、この方面の研究が重要であることの傍証になります。

前著『前世を記憶する子どもたち』とともに、本書は、人間の心の本質に関心を持つ人たちに、このうえなく重要な証拠を提出しています。果たして、人間の心は、死後にも存続するのかどうか、また、生まれ変わることがあるのかどうか、という問題を真剣に考える方には、必読書となるべき本でしょう。著者は、一九七七年に精神医学誌に掲載された論文の中で、次のように述べています。「この証拠は、現段階ではまだ不完全なので、説

註2　この機会にふれておきますが、カトリックの作家であった遠藤周作は、スティーヴンソンの生まれ変わり研究にきわめて強い関心を寄せ、いくつかの作品を執筆しています（『わが恋（おも）う人は』〔一九八七年、講談社文庫〕、『万華鏡』〔一九九三年、朝日新聞社〕、『深い河』〔一九九三年、講談社〕）。そのおかげで訳者は、遠藤氏のご紹介により、五〇名ほどのキリスト教芸術家の集まりで、生まれ変わりの話をする機会を与えられたことがありました。宗教的な反発もなく、真剣に耳を傾けてくださいました。その一方では、遠藤氏の本が九州で〝禁書〟になっていたという話も聞いています。

註3　小児自閉症を持つ子どもの場合にも、少なくともこの一部については、同様の観察事実が知られています。また、そうした子どもたちの中には、ほとんど練習もせずにさまざまな技術を身につけてしまう例もあるようです。この種の事例を専門家が真剣に研究しようとしないのは、非常にふしぎなことに思えます。

得力が乏しいことは確かである。〔人間の〕死後生存を信じたくなければ、死後生存の証拠を否定する以外道はない。それは、人間の死後生存の裏づけとなりそうな証拠が相当数蓄積されているからであり、こうした証拠の存在を知った者は、誰しもが、その証拠をもとに自らの立場を明確にする必要があるからである」（スティーヴンソン、一九八四年、五二ページ）。これらの証拠を否定したいのであれば、その証拠を自分の手で探し出す必要があることになります。しかし、もしこうした研究のあら探し的批判をしたいのであれば、なぜ自分はそのような願望を持っているのかを明らかにするために、自らの心を深く探らなければならないことになるでしょう。

［参考文献］

笠原敏雄編（一九八七年）『サイの戦場――超心理学論争全史』平凡社

T・シュローダー（二〇〇二年）『前世を覚えている子どもたち』大野百合子訳、ヴォイス

I・スティーヴンソン（一九八四年）「人間の死後生存の証拠に関する研究」笠原編『死後の生存の科学』〔叢文社〕所収

Brody, E.B. 1977. Research in reincarnation and editorial responsibility. *Journal of nervous and mental disease* 165: 151.

Stevenson, I. 1989. Some of my journeys in medicine: The Flora Levy Lecture in the Humanities.
http://www.healthsystem.virginia.edu/internet/personalitystudies/some-of-my-journeys-in-medicine.pdf

Wallis, D. 1999. Conversations/Dr. Ian Stevenson; You may be reading this in some future past life. *New York Times* September 26, 1999.

◎訳者紹介――**笠原敏雄**（かさはら・としお）＝一九四七年生まれ。早稲田大学心理学科を卒業後、北海道や東京の病院で心因性疾患の心理療法を続け、九六年、東京都品川区に〈心の研究室〉開設、現在に至る。著書に、『幸福否定の構造』（春秋社）、『希求の詩人・中原中也』（麗澤大学出版会）その他が、訳書に『前世を記憶する子どもたち』、『生まれ変わりの研究』（以上、日本教文社）その他がある。

連絡先　〒一四一―〇〇三一　品川区西五反田二―一〇―八―五一四　心の研究室

電子メール　kasahara@02.246.ne.jp　ホームページ　http://www.02.246.ne.jp/~kasahara/